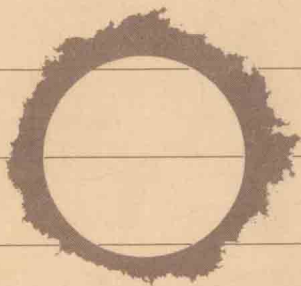


パリ燃ゆ 3

大佛次郎



大佛次郎（おさらぎ じろう）
本名、野尻清彦。1897（明治30）年横浜に生まれる。東大政治学科卒業後、外務省勤務などを経て文筆業に入る。戦前戦中戦後を通じ、時代小説、現代小説、ノンフィクション、戯曲、童話にいたる幅広い分野の名作を世に送り続けた。代表作としては『赤穂浪士』『霧笛』『帰郷』『パリ燃ゆ』などがある。ライフワークとも言うべき『天皇の世紀』を朝日新聞連載中の1973年、75年余の生涯を終えた。

パリ燃ゆ 3

昭和58年3月20日 第1刷発行

定価 420 円

著 者 大 佛 次 郎

発 行 者 初 山 有 恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

© MASAKO NOJIRI 1983 Printed in Japan
0193-260913-0042

パリ燃ゆ 3

大佛次郎

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑽 治

目次

第三部 ガンベッタ(続)

マルヌ渡河 9

極月 36

壁書 75

裏の裏 102

正月二十二日 129

敵と味方 143

おとし穴 170

シモンの使命 184

ユゴ一の舞台 208

死んだ街 247

三月十八日 273

パ
リ
燃
ゆ
3

第三部 ガンベッタ（続）

マルヌ渡河

1

オルレアンを攻略しながらオーレエル・ド・パラディヌ將軍は頑固な驢馬ろばのように動こうとしない。ティエールが裏面から策勵して、そうさせたのである。

軍人でないガンベッタとフレシネが十一日間待つて、しびれを切らせて、自分たちから命令を出してロワール軍を進撃させた。これが、十一月二十一日のノジャン・ル・ロトルーの戦闘で敗北し、軍は左翼から敵の脅威を受ける地位に立った。

十一月の最後の週には、ガンベッタも、最早、自力に依る進撃を思い止った。ティエールが阻止に乗込んで来た十月初、またオルレアン占領の直後十一月十日付近なら立派に実現の可能性があったものを、メエッスのフリードリッヒ・カールの大兵团が南下して防壁を築いたのでは、敵の兵力は以前の三倍となり、ロワール軍の戦力では突破出来る見込みはない。ガンベッタは、今はトロシュの軍が北西部ルワンに出撃してくれば、敵の兵力が移動を起してロワール軍が救われようと望んだ。さもなくば、ロワール軍が東方に迂回して敵の背後をおびやかす、東部国境で、

ドイツ軍と本国との連絡を切断、冬將軍の援助にも期待して、パリ包圍の鉄環をゆるめることである。

眞實な性質のガンベッタは、ファーヴル外相からパリの食糧が十二月十五日頃までだろうと聞かされると、「食糧の補給の為に万全の処置を尽す。」と言ってやる。首都を降服させて国民に希望を失わせたくないのである。十二月四日に成ってから同じ意志をファーヴルに繰返して告げる。「貨車に食糧積込み完了。」すぐとどける用意がある。ただ最後の努力をパリで試みて欲しい。ただ、この手紙もデュクロ將軍の出撃の後にパリに着く。

パリでトロシュが南方に撃って出る決意をしたのは、十一月も終ろうとしてからである。「二十八日月曜日には我方の準備なり二十九日火曜日にデュクロ將軍が城外の兵団をひきいて、敵の陣地に攻撃に出て、成功した上は、（ロワール河上流の）ジアンを目がけて進撃を続けよう。」

「大演習」と、ギユマンが今日、皮肉に形容するシャンピニイ出撃が決定されたのである。トロシュだけが、やや真剣悲壯に、南方ロワール軍を救援し、パリの包圍を破ることに期待した。これに比べて將星たちの腰は皆、重い。眞氣ほんきでなく形だけのものなら、やって宜しかろう。その肚はらであった。そうしなければ、戦争の専門家としてパリの市民の非難の的となるのだから。

内容のない示威的なものだから、宣伝を必要とした。スパイも市中に入っていくように、作戦上の不利を考えなかったのか？ 十一月二十八日、二十九日に市民の前に続々と政府から「大なる戦いの日が来た。」との趣旨の公示が大々的に出された。

永い間の御期待に初めて答えたのである。

「フランスは闘わんと欲し、我が兄弟たちは最後の戦闘の為にバリの外に來れと我々に呼びかけている。」トロシュはこう語り、政府としての訴えも同様である。「市民諸君は軍の司令官が抑制するのに苦しんだほど逸り立つ愛国心を以て、軍の努力を待望した。今や、彼らは地方諸県の我が兄弟たちを出迎えに出動する。諸君と決意を分かち、強力な攻撃手段を準備するのを義務とした。彼らはその手段を結集し終った。戦いは今である。」

特にデュクロ將軍は、指揮下の第二軍団の兵士に訴えた。

「敵の鉄環を破るべき時が來た。諸君は十五万の大軍である。敵軍はロワール河の沿岸に最大の兵力を擁する上に精銳なる部隊を増強した。」

何ぞ、怖れんやであつた。

「本官は諸君の前、全国民の前に誓うものである。自分は死者たるか勝利者たらずんば二度とパリに帰還せざるものである。諸君は私が陣頭に仆れるのを見るだろうが、退く姿を見ることはない。」

實際に不思議な神経である。このデュクロが最も戦意の稀薄な將軍で、實際に、ロワール河までする意志などない。

そして政府の告示も、全三節あつて、その内の二節が国内の治安維持について警告したものであつた。「軍司令官たちが氣高くも彼らの生命をなげうって戦場に向う最高至上の時に當つて、我らは当然不退転の心と公民の美德を以て協力すべきものである。〔たとえば一つの敗戦、退却があつた場合、〕精神の打撃が如何に深かろうとも平静でいる勇氣を持たねばならぬ。極く小さ

いものでも市中に騒擾を煽るような者は何人なんびとだろうとも防衛者の大義を裏切ること、プロシア軍に奉仕せる者と見るべきである。(中略)一切の内乱の酵母を以て恥すべき死の胚芽はいがと認め、これを徹底的に抑圧する決意の中に我々の力を求めよう。」

トロシユはこの一戦に国民軍をも投入しようと提言した。軍民一致の戦闘としようと望んだのである。デュクロ將軍はこれを強硬に拒否した。市民から募った国民軍の方が徹底抗戦を望んで過激だからなのである。今度の出撃でデュクロ將軍の頼みになるのは旧軍人部隊だけであつた。しかも、その公称十五万の兵团が、デュクロに付いて出陣したのは、實際は五万名を算かぞえただけであつた。

突破作戦など考えなかつた。パレードに過ぎぬ。田舎向けの出興行である。市民はそれとは知らぬ。それでも財界に人氣がなかつたことは、政府の出撃発表とともに株式取引所で平均三パーセント、相場が急落したことに現れた。

2

開幕は、いっせいに華々しく行われる筈であつた。セーセ提督は、海兵隊をひきい、今日まだ人が入ってない東方のアヴロン高地を占領し、砲兵隊を配置し、前面の敵軍に火蓋を切る。

デュクロの主力軍が出撃する地点とは反対側の、サン・ドニ方面では、ラ・ロンシユール將軍が、その他、市の西方でも南方でも別の部隊が攻撃に出る。ヴィノワ將軍の兵团は南の郊外のライの占領を命じられた。二十九日午前六時に出撃するよう命令が出た。ライは、デュクロの主力

軍が攻撃する地点から、十キロも遠く主力の行動に関係のない場所である。

パリの郊外の東南部でマルヌ河が大きく迂回して袋のように包んだ半島状の土地、サン・モールの地帯にはファヴェ將軍の砲兵部隊が出陣し、主力の右翼の進撃する為にドイツ軍陣地に火砲をあびせかける。市民を必ずや満足させる壮大なる幕開きとなって、出撃は成功を約束された。包囲せられているパリ城塞が急に目が醒めたように各方面に向って行動を起すのだから、百花開くの観があらう。

ただ、この大作戦に加わって主力部隊の働きをする兵に、各自六日分の糧食と、百八発の銃弾が渡されただけだった点が、総司令官の隠れた意志を暗に見せたものであった。闘いながらロワール河畔のジアンまで行くのに、二百キロの距離を行かねばならぬのに、この酷寒の季節に露営用の毛布も渡されない。テントも用意されず衛生隊も付いていなかった。あまり遠くまで行けないように設定されている。司令部付副官イリソン・デリソン伯爵の手記が残されている。

「出撃すると言って、どの將軍もそんなことを考えるだけもしなかった。どんな事態が起ろうとも、帰ることになっていた。行軍する部隊に欠いてはならぬ輜重隊しちょうたいも要らなかつた。」

あまりパリから離れて闘ってはならぬと司令官たちは知っていた。それは何の為か？ 後にいる「赤」の為である。軍司令官は、そのことに危険を感じ氣遣っていた。まことに軍人たちは銃後を憂えて、前に出たがらなかつたのである。実際の戦闘に入ると、兵はよく闘ったし、よく死んで、ドイツ軍を圧倒した。しかし、総司令部は敗北を当然と理由づける口実を見つけ出す為に苦心を払っていた。どこでもフランスは分裂していたのである。

二十八日の深夜になると、パリ市中では軍の作戦が起されたのを知った。ジョアンヴィル付近で主力にマルヌ渡河を決行させる為に、工兵隊の架橋機材を、市中を通ってその方面に運ぶのが見られた。市民は街路に出た。手に汗を握って、夜明けと共に砲声が起るのを待った。

偶然でなく、マルヌに舟橋を渡す第一歩から、出撃は失敗した。ル・フロ陸相までが、十二月二日の閣議で、「企画から拙劣なものを、よくも実行させた。」と非難したが、後の祭である。克蘭ツ技師の指揮で工兵隊が活動し、午前二時までには架橋に成功し、使用可能に出来る予定であった。隠れていた場所を二十八日日没とともに出て作業にかかったが、幾度か試みて急な流れが舟を押流して、橋がかからないのである。

部隊を今夜中にマルヌ河を渡らせぬと、両翼と行動の連絡を失い、作業が齟齬^{そご}すること、躍起となって工兵を励まし努力を重ねたが、失敗を認めざるを得なかった。上流で爆破させてあった橋の残骸が河を塞ぎ、水路を狭められた水が極端なスピードと圧力を以て、架橋兵を襲うのである。事前の測定が完全でなかったのである。それを隠す為に、不意の不可解の増水に依って抵抗出来ぬ打撃を受けた、と報告された。

トロシュは翌年になっても真相を隠した陳述を行った。二十八日の夜から二十九日にかけて、万事好調だったのが、「いざ、渡河と言う時に」先頭の兵士たちが、まさに橋に足を踏入れるばかりになって、おそろしい増水に橋は流されて了^{しま}った。工兵隊は予定時間に作業を終り、任務を達

成したのに、この不幸であった。

デュクロ將軍もこれに口裏を合せて査問委員會で証言した。蒼白になったクランノ技師か、デュクロ將軍の前に出頭したのか午前二時である。「増水かものすごい高さに達し、舟を覆えして橋を破に吞んで了った。」

二十九日早朝を期した奇襲作戦は、これで不可能となった。工兵隊か次の架橋に成功するとは誰も保証出来ない。ドイツノ軍は夜中に事態を知った。攻撃に出るとは探知してあっても、どの方面を突いてるか、不明だったのか、はしめて、この地点と確認したのである。奇襲の効果はもう失われた。二十九日一日中、ドイツノ軍は増援を行った。

警報を敵に与えて了ってから、同じ作戦を遂行し得るか？ 攻撃開始か不可能と明らかになったのは、午前二時であった。デュクロは直ちに緊急に友軍に連絡すへきである。ヴィノワ將軍の兵団は午前六時を期してライの敵陣地に出撃する命令を受けていた。

デュクロは、これを連絡しない。ウィノワは、王力かマルヌ河を渡って出撃したと信じて、軍の行動を起した。激戦となり僅かの間に多数の兵か仆ふたれている。

その時、トロヌカマルヌの作戦齟齬を知って、ヴィノワ將軍に知らせるように命令したのか、二十九日朝七時半で、將軍に電報が入るのは、その一時間後である。戦闘は開始されていた。百四十八名の多数の戦死者を出した戦闘は、ひととおりのものでない。

予定どおり、ライを占領した。しかし、王力か行動を起さぬ限り、これか何の意義かあろう。敵中に入って離れ島のように孤立してつゐたたけである。至急に陣地を固めるへき工兵隊も後続